平成25年6月20日
No. 13－128
株式会社 いよぎん地域経済研究センター

県内大学生の暮らしぶりについて

～高まる学生の貯蓄志向～

株式会社いよぎん地域経済研究センター（略称　ＩＲＣ、社長　山崎　正人）では、このたび下記のとおり、県内大学生の暮らしぶりについて取りまとめましたので、お知らせいたします。なお、詳細は、2013 年７月 1 日発行の「IRC Monthly」2013 年７月号に掲載いたします。

【調査概要】

大学生の暮らしぶりを把握するため、2013 年４月に県内大学生（愛媛大学法文学部「地域政策論」、松山大学経営学部「地域産業論」、松山大学経済学部「金融論Ｉ」の受講生 378 名）を対象にアンケートを実施した。

記

【調査要旨】

1. 月間の収入総額の平均は、自宅生が 6.6 万円、自宅外生が 11.2 万円であった。自宅生の収入総額は、2009 年の調査開始以来最低となったものの、自宅外生の収入総額は２年ぶりに増加に転じた。
2. 「親から仕送りをしてもらう」自宅外生は前回調査に比べて 12.6 ポイントと大幅に上昇し、約８割となった。
3. 「毎月貯蓄している」学生は、自宅生が７割、自宅外生は６割とどちらも前回調査を上回り、特に自宅外生の回答率は年々上昇している。学生の貯蓄志向は高まっており、また定着していると言えるだろう。
4. 貯蓄残高は、「10～30 万円未満」との回答が最も多かった。前回調査と比べると、「なし」の割合が下落しており、貯蓄残高からも学生の貯蓄志向の高さがうかがえる。貯蓄の目的で最も多かったのは、「将来への備え」、次いで「就職活動のため」であった。
5. 大学生活が「充実している」と「どちらかといえば充実している」という学生が合わせて８割を超えた。

以　上

株式会社　伊予銀行　愛媛県松山市南堀端町１番地　〒790-8514　TEL(089) 941-1141

【アンケートの概要】

時　期：2013 年４月中旬

対　象：愛媛大学法文学部「地域政策論」、
松山大学経営学部「地域産業論」、
松山大学経済学部「金融論Ⅰ」の
受講生

方　法：教室でアンケート用紙を配付し、
その場で回収。無記名方式。

回答数：378 人

【回答者属性】

大　学	愛媛大学	51.6%	松山大学	48.4%
性　別	男性	54.5%	女性	45.5%
学　年	１回生	0.0%	２回生	16.4%
	３回生	65.9%	４回生	16.4%
	その他	1.3%		
出身地	愛媛県内	68.3%	四国3県	11.4%
	中国・九州	16.4%	近畿	1.1%
	関東	0.3%	その他	2.6%
住まい	自宅	43.8%	自宅外	56.2%

(注) 集計は不明分を除く。また、四捨五入して表記しているため、内訳の合計が 100%にならないことがある（以下、同じ）。

当社では、県内大学生の暮らしぶりを把握するため、県内大学生を対象にアンケートを実施した。以下はその結果である。

１．月間の収支状況

（１）収入総額とその内訳

県内大学生の月間収入総額の平均は、自宅生が 6.6 万円、自宅外生が 11.2 万円となった。自宅生の収入総額は、2009 年の調査開始以来最低となったものの、自宅外生の収入総額は２年ぶりに増加に転じた。

学生全体では親からの援助（小遣い・仕送り等）が増加した一方で、増加傾向にあった奨学金が大幅に減少した（図表−２）。

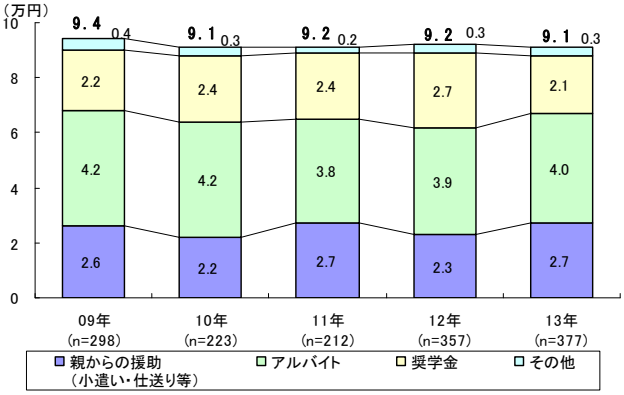
図表−１　毎月の平均収入額（ｎ＝377）

（単位：万円）

	全体	自宅生	自宅外生
収入総額	9.1	6.6	11.2
親からの援助（小遣い・仕送り等）	2.7〔4.7〕	0.6〔2.0〕	4.4〔5.5〕
アルバイト	4.0〔5.2〕	4.4〔5.4〕	3.7〔5.1〕
奨学金	2.1〔5.6〕	1.5〔5.0〕	2.6〔5.9〕
その他	0.3〔4.0〕	0.1〔2.8〕	0.5〔4.5〕

(注) 各数字は全回答を平均したもので、〔　〕内は「ゼロ」との回答を除き平均したもの

図表−２　収入総額の推移



（注）太字は収入総額

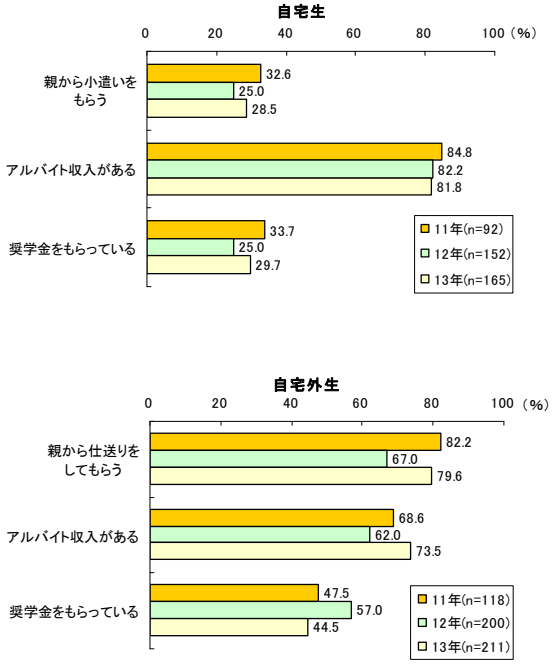
（２）収入項目別の学生割合

自宅生で「親から小遣いをもらう」が 28.5%、「奨学金をもらっている」が 29.7%と、ともに前回調査よりも上昇した（図表−３）。

「親から仕送りをしてもらう」自宅外生は前回調査に比べて 12.6 ポイントと大幅に上昇し、79.6%となった。しかしながら、依然仕送りがない自宅外生が約２割いる。2012 年の全国調査※では、仕送りがない自宅外生は 10.0%であり、県内自宅外生の仕送りなしの割合は、全国よりも高い水準となっている。

※全国調査とは全国大学生活協同組合連合会「学生生活実態調査」

図表－３　収入項目別の学生割合



２．月間の支出状況

（１）支出総額とその内訳

月間支出総額（貯蓄を除く）の平均は、自宅生が4.9万円、自宅外生が9.9万円となった（図表－４）。

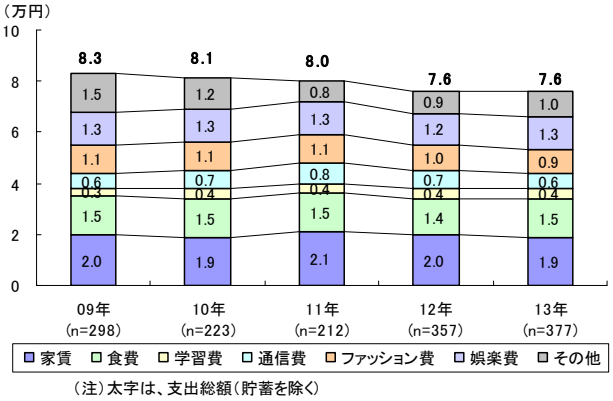
全体の推移をみると、ファッション費や娯楽費にはほぼ変化がない。収入が減少しても、自分の楽しみにつながるような消費には、支出を惜しまないのかもしれない（図表－５）。

図表－４　毎月の平均支出額（ｎ＝377）

（単位：万円）

	全体	自宅生	自宅外生
支出総額	7.6	4.9	9.9
家賃	1.9	0.0	3.4
食費	1.5	0.8	2.1
学習費（授業料除く）	0.4	0.4	0.4
通信費	0.6	0.5	0.7
ファッション費	0.9	0.9	1.0
娯楽費	1.3	1.3	1.3
その他	1.0	1.0	1.0

図表－５　支出総額の推移



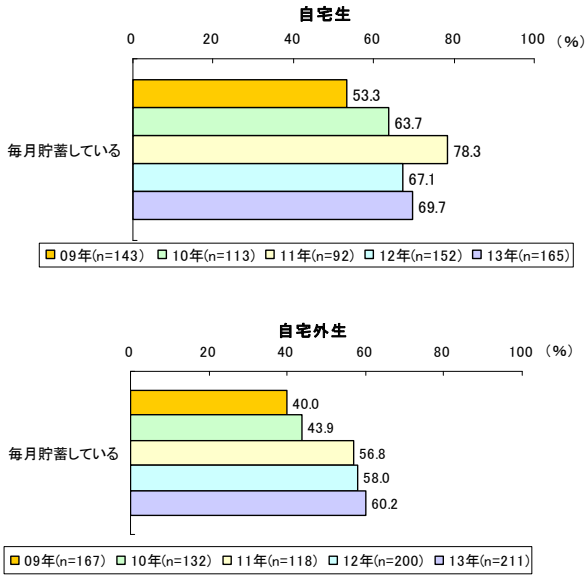
（注）太字は、支出総額（貯蓄を除く）

（２）　貯蓄する学生の割合と貯蓄額

「毎月貯蓄している」学生は、自宅生が 69.7%、自宅外生は60.2%とどちらも前回調査を上回り、特に自宅外生の回答率は年々上昇している。学生の貯蓄志向は高まっており、また定着していると言えるだろう（図表－６）。

毎月の平均貯蓄額をみると、自宅生1.7万円、自宅外生1.3万円となった。どちらも、家賃、食費を除いた支出項目と比べると、金額が大きく、自由に使えるお金に関しては消費よりも貯蓄に重点を置いているようだ（図表－７）。

図表－６　毎月貯蓄する学生の割合



図表−７　毎月の平均貯蓄額（ｎ＝377）

（単位：万円）

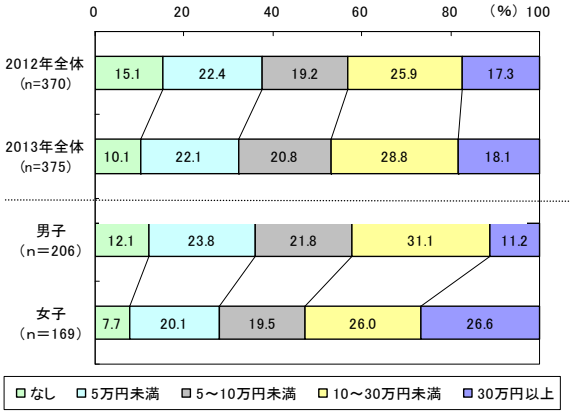
	全体	自宅生	自宅外生
貯蓄額	1.5 〔2.3〕	1.7 〔2.4〕	1.3 〔2.2〕

（注）各数字は全回答を平均したもので、〔 〕内は「ゼロ」との回答を除き平均したもの

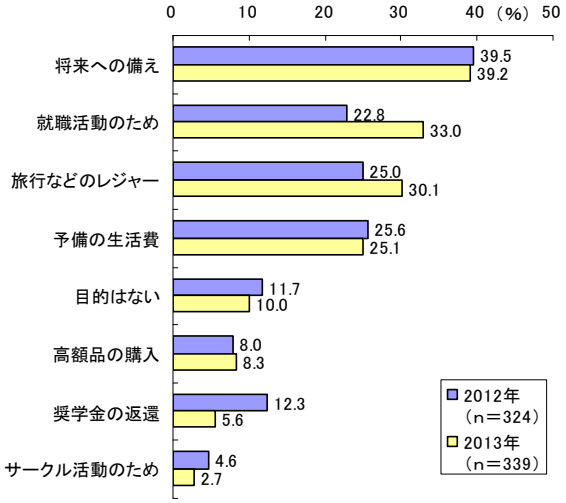
貯蓄残高は、「10～30 万円未満」（28.8%）との回答が最も多かった。前回調査と比べると、「なし」の割合が５ポイント下落しており、貯蓄残高からも学生の貯蓄志向の高さがうかがえる（図表−８）。

貯蓄の目的で最も多かったのは、「将来への備え」（39.2%）、次いで「就職活動のため」（33.0%）、であった（図表−９）。

図表−８　現在の貯蓄残高



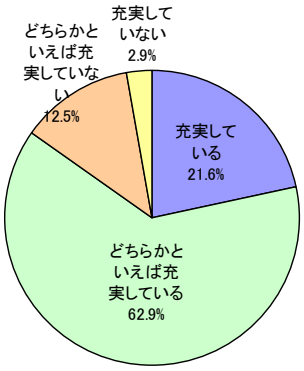
図表−９　貯蓄の目的（上位２つ以内で複数回答）



３．大学生活の充実度

大学生活が充実しているか尋ねたところ、「充実している」と「どちらかといえば充実している」を合わせて、84.5%となった。金銭面から見ると、学生の収入環境は厳しくなりつつあるが、学生はその範囲でやりくりしており、総じて充実した大学生活を送っているようだ（図表−10）。

図表−10　大学生活の充実度（ｎ＝375）



おわりに

大学生アンケートを開始した 2009 年以降、県内大学生の暮らしぶりに大きな変化は見られない。ただ、貯蓄に対する姿勢を見ると、堅実性が高まっていることがうかがえる。